

Y22a 市民科学で読み解く「光害」と「光害研究」の動向

大西浩次（国立長野高専）、大西昂（東北大情報科学）

「市民科学」＝”Citizen Science”の源流を探ると、一つは、科学研究のプロ（職業研究者）とアマチュア（市民研究者）の分離以前（19世紀）のNaturalistと呼ばれるアマチュアであろう。もう一つに、1960～70年代にかけて、欧米に於いて、プロが積極的に社会問題に参加する「市民科学運動」（日本では「市民の手による科学」運動）がある。これは環境運動から反核運動などが展開された。日本では、自然保護運動と共に、「日本星空を守る会」による光害反対運動などが起きている。一方、欧米の行政側は、このような運動に対して、1980年代には、科学と技術に関する審議への市民参加を促すコンセンサス会議やサイエンスショップが行われ、この流れの中で、1990年代、科学政策のための市民参加への支援策として、今日の「市民科学」のスタイルが誕生したのである。

いま、「長野県は宇宙県」では、天文文化を市民の手で解明を目指す市民科学プロジェクトを進めている。この研究対象の一つとして、光害防止運動や星空環境保護運動などの運動を「市民科学」の文脈から読み解きたいと考えている。この事前調査として、国内外の「光害」防止活動や「光害の科学研究」の動向をデータベースに基づいて調べることにした。本研究では、「光害」”light pollution”のメカニズムを中心とした「光害の科学研究」を、NASA/ADS, および, CiNii Reseach から、「光害」の市民運動やその報道を国立国会図書館サーチ, ジャパンサーチ, 主要新聞のデータベース（朝日, 毎日, 読売）などを使い、「光害」や”light pollution”の用語の出現の頻度やその内容の変遷の様子など調べてみた。「光害の科学研究」では、国内外の「市民科学運動」と研究論文の優位な関連は見る事が出来なかった。一方、報道では光害反対運動から始まり、90年代にピークを迎えていることなどが見て取れる。これらの詳細を「市民科学」の観点から報告したい。